

日本文学振興会『英訳萬葉集』（一九四〇）の 〈和文章稿〉をめぐる考察

河路 由佳

一. はじめに

一九四〇年（昭和一五）三月、日本文学振興会「編」*The Manyōshū*（英訳萬葉集）（以下、『英訳萬葉集』）が刊行された。一九三二年十二月に財団法人として設立された日本文学振興会の第十七小委員会による「日本古典翻訳」の成果であった。委員会で『萬葉集』より一〇〇〇首を選出し、まず日本語による原案を作成した。これが〈和文章稿〉である。

和歌の英訳は、①分かりやすい現代語で、②韻を踏まない自由詩の形で、③直訳に過ぎず、意訳に過ぎず、④ある程度の自由を認め、⑤それだけ読んでも詩として味わえること（日本文学振興会一九三九A、二六四頁より河路が整理）とされた。その原案としての〈和文章稿〉は、①から④までを満たす形式、即ち、分かりやすい現代語の自由詩の形で、ある程度自由に作られた。担当したのは、山田孝雄^{よしお}、吉澤義則、佐佐木信綱、斎藤茂吉、武田祐吉、橋本進吉の六名である。

英訳は、石井白村^{はくそん}（雄之助）、小畑薫良^{しげよし}が〈和文章稿〉を訳して東北大学に在職中の英国の詩人、ホジソン（Ralph Hodgson）が校閲し、それを委員会にかけて確定された。その果実である『英訳萬葉集』は、内外で高く評価され、今日も版を重ねている。それだけ読んでも詩として味わえることが承認されたと言つてよい。

それでは、〈和文章稿〉はどうなのだろうか。今日に至るまでこれが公刊されたことはない。六名が国家の威信をかけて筆を揮つた『萬葉集』の現代日本語訳、〈和文章稿〉は「独立して読んでも十分詩として味わえる」のか、あるいは、そうではないのか。

筆者は、三重県鈴鹿市教育委員会の許可を得て、二〇二二年三月下旬、佐佐木信綱記念館（管理母体は鈴鹿市教育委員会）に所蔵されている〈和文章稿〉の現地調査を行った。本稿では調査報告と合わせて、〈和文章稿〉の考察を行う。文中、『萬葉集』

の作品に付けた数字は旧国歌大観番号である。引用に際しては、原則としていわゆる旧字体を現在一般に使われる字体に改めて示す。なお、引用文中の「…」は、河路による中略で、亀甲括弧内は河路による補注である。

二、『英訳萬葉集』に先立つ佐佐木信綱の取り組み

二一・一、父、弘綱の遺志を継いだ和歌の現代語訳

国家的事業としての『英訳萬葉集』は、日本が国際連盟を脱退するころから高まった日本文化の海外への発信強化の文脈で実現したといえるが、指導的役割を担った佐佐木信綱（一八七二～一九六三）は早くから『萬葉集』の内外への普及活動に取り組んでいた。

まず、『萬葉集』をはじめとする和歌の現代語訳については、信綱は、父・佐々木弘綱（一八二八～一八九二）の幕末以来の志を受け継いでいた。弘綱は、青年期から後学のための古典の口訳（現代語訳）を自らの道と心得、「数十種（天川・南編一九〇四、一六〇四頁〔執筆は信綱〕）を仕上げたが、「出版せしは僅かに三種（同）」にとどまった。藤田文苑堂から出版された和綴じ本の叢書、「添註 俚言解」の『竹取物語』（一八五七）、『土佐日記（上下）』（一八八四）、『伊勢物語（上下）』（一八八五）である。²³ 遺された原稿から十一種を選び信綱が補筆して改めて出版を企てたのが「口訳国文叢書」（人文書院）で、一九三八年十一月か

ら一九四〇年九月までに『土佐日記』『更級日記』『十六夜日記』『伊勢物語』の四種が出版されたが、残る『竹取物語』『徒然草』『古事記日本紀歌』『後撰集』『百人一首』『萬葉集（巻一、巻二）』『源氏物語（桐壺、帚木、空蟬、夕顔）』は、未刊に終わった。「数十種」の全貌は不明だが、信綱が選んだ十一種を見ると、「歌」と限定される記紀を含めて、約四割が韻文である。既刊の『土佐日記』『伊勢物語』においても本文中の和歌は訳出されている。和歌の現代語訳は二人の志であったと言える。

二一・二、注釈的現代語訳と文芸的現代語訳

一方、同時代に川端康成、与謝野晶子ら二十名の文学者が現代語訳を分担した『現代語訳国文学全集』（非凡閣）は、一九三六年十月から一九三九年三月までに『古事記・日本書紀』から『梅ごよみ』まで全二十六巻を完成した。和歌集などの韻文は含まれず、『土佐日記』や『伊勢物語』においても文中の和歌は原歌のまま、小文字で「歌意」を添える形式である。

弘綱・信綱の「口訳国文叢書」との違いを、『伊勢物語』第二十三段の「風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり行くらん」を例に示す。

『口訳国文叢書四』 口訳伊勢物語（佐々木弘綱〔著〕信綱〔補〕一九四〇年）七九頁

風ガ吹クト沖ノ白浪ガ立ツ、其ノ（立ツト云フ名ノ）立田

山ノ恐ロシイ山道ヲ、夜中ノサビシイ時ニ、我が夫ハオ一人
人オ越エナサルノデアラウカ。(サゾ侘ビシイ事デセウ
二。)

〔現代語訳国文学全集第二巻〕伊勢物語・落窪物語（窪田空穂
〔訳〕一九三八年）四九頁

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり行くらん

〔歌意〕立田山を、夜、君がひとり超えて行くことで
あらうか。（風吹けば沖つ白浪）は、風が吹くと、沖つ
白波が立つと続き、立田山へ「立つ」で懸かる序。「立
田山」は大和国平群郡亀ノ瀬越。河内へ行く途中にある
山。路の悪い山として聞えて居る。）

和歌も現代語で読ませるか、和歌は（現代語訳はできない、
またはすべきではないから）解説を添えて原歌のまま読ませる
か、『英訳萬葉集』編纂の時期の、和歌の現代語訳に対する対
照的な姿勢を読み取ることができる。

『萬葉集』の注釈書に現代語訳と評釈を備える「近代的（注釈）」
は、次田潤（一九二二）『萬葉集新講』以降、広く行われるよう
になったという（小松二〇二二）。この場合の現代語訳は、原歌
を離れて独立して味わうことは想定されない。「現代語訳国文
学全集」の和歌に添えられた〔歌意〕は、この注釈的現代語訳
と言えるだろう。

それに対して、現代語訳を原歌とは別に作品として示す「口
訳国文叢書」の場合は、「独立して読んで味わう」べき文芸的
現代語訳である。即ち、現代語訳が「独立して味わえる」もの
かどうかは、必ずしも巧拙の問題ではなく、注釈的か文芸的か
の立場の違いにもよる。

二一三．『萬葉集』の英訳計画

佐佐木信綱は『萬葉集』の英訳を志すのも早かった。十五歳
の春（一八八六年）から国民英学会で「イーストレーキ先生」に
英語を学び、その頃から、『萬葉集』の英訳の完全なものが出来
たらば」と考えていたという（佐佐木一九四二、六一頁）。そして、
交流のあったチェンバレンが一九一一年に日本を去る時に「日
本のおいし詩は、よい翻訳を得て世界に紹介される日が待たれる」
と言ったのを心に刻んでいた（佐佐木一九五三、七三頁）。

また、佐佐木は『萬葉集』の海外での受容に関心が高く、外
国語訳の文献を収集していた。佐佐木（一九四二）に十九世紀か
ら二十世紀にかけての『萬葉集』の海外での翻訳事情をまとめ
ており、『萬葉集事典』（一九五六）巻末の「翻訳」の項に主な
文献を書誌情報や写真を添えて解説している。佐佐木は「日本
人でさへも難解の書（佐佐木一九四二、六〇頁）」を海外で外国人が
翻訳したことに敬意を表しつつ、それらが時に誤りを含み、不
十分であることを指摘する。『萬葉集』の外国語訳は「文学の
形に現はれた日本の精神の深層を世界に伝えること」で、「真

に萬葉の精神を訳出するは、邦人でなければならず、また邦人の任である（佐佐木一九四八、四三頁）」と佐佐木は考えた。⁵⁾

また、佐佐木は海外への『萬葉集』の紹介に熱心で、一九二五年に全二十五巻の『校本萬葉集』を完成させたとき、姉崎正治、新村出と相談して「北京・印度支那・印度・オーストラリア・ベルギー・ドイツ・イギリス・フランス・オランダ・ハンガリー・アメリカの十一国二十二の大学及び図書館に、英文の解説を首巻の初めに加へて寄贈した（佐佐木一九五六、一七四頁）」。

そして、一九二九年頃、佐佐木は外務省の知人を介して外務省囑託の小畑薫良（一八八八—一九七二）に協力を求め、『萬葉集』の英訳にとりかかったのである。小畑は、コロンビア大学大学院で中世英文学を学んでいた一九二二年、李白の詩の英訳（*The Works of Li Po: The Chinese Poet*（李白詩集）. E. P. Dutton & Co.）を出版して、中国の詩人、聞一多に称えられる（鈴木一九九七）など高い評価を受けていた。それで、信綱は彼に白羽の矢を立てたのだった。日本学術振興会の事業が始まる前に小畑は佐佐木信綱の選んだ代表歌の中から数十首を訳していた（小畑一九四三、二二八頁）。

三、日本学術振興会編『英訳萬葉集』

三〇一・『萬葉集』英訳計画の日本学術振興会の事業への吸収発展

一九三三年二月、常任理事国であった国際連盟を脱退した日本では、国際社会の「誤解」を解き、日本の文化を認めさせることの国家的重要性が唱えられた（河路二〇一）。「学術の振興」も、「国防界並産業界ノ權威ヨリ絶大ノ熱誠ヲ以テ迎ヘラルルニ至（日本学術振興会一九三五、一—二頁）」り、一九三二年十二月二十八日に文部大臣の認可を受けて財団法人日本学術振興会が設立された。具体的な事業別に特別委員会、小委員会が組織され、予算がついて活動が始まるのは一九三四年度からのことで、最初に設置された小委員会十九の中に「日本古典翻訳」を目的とする第十七小委員会があった。小畑（一九四三）は、信綱から「当分二人の仕事は中止してこれ（日本学術振興会の事業）に合流（二二八頁）」するように言われて喜んで従ったと述べている。信綱と小畑の二人の計画は時宜を得て、国家事業として本格的に取り組まれることとなったのである。

三〇二・一九三〇年代における和歌の翻訳の国家的意義と目的
この時期、なぜ『萬葉集』の英訳が国家的に重要だと考えられたのだろうか。日本学術振興会（一九三三）によると、第十七小委員会の目的は「日本古典ヲ翻訳シテ我國民精神文化ヲ海外

二宣揚セントスル」ことで、『萬葉集』が選ばれた理由は「最古ノ歌集デアリ、ソノ内容ハ上天皇皇族ヨリ下耕夫ニ至ル極メテ広汎ナ範圍ノ歌ヲ網羅シ、然モ後世歌集に見ルコトノ出来ナイ雄健率直ノ表現ガ特色デアリ、国民精神文化ノ淵源ヲ示ス最モ貴重ナモノガアル故（二六頁）」であつた。

『英訳萬葉集』の（総論）の第二部の（和文章稿）を担当した阿部次郎は、阿部（一九四三）に、日本古代の仏像などの造形芸術には大陸の影響が大きいのに對し、『萬葉集』は「萬葉歌人のつかふ言語が日本語で（二六頁）」、固有の言語が高度に発達していたことを示しており、「美術史とはちがつた自信を我々に与へる（同）」と述べている。

似た趣旨の主張は別のところでも聞かれた。一九三四年に国際文化事業を担う外務省及び文部省所轄の財団法人として設立され外国語による日本文化の発信に取り組んでいた国際文化振興会は、一九三五年六月六日東京華族会館でフランス人のジョルジュ・ボノーによる「日本詩歌と外国語」と題する講演会を開いた。講演の内容を堀口大学が日本語訳した小冊子、ボノー（一九三五）によると、西欧諸国は日本精神をインドや中国またヨーロッパの精神の混合物だとみなしがちで、いま日本はこの誤解を解く必要があると語り、日本語の古典詩歌こそが、日本人の精神文化の神髓が諸文化の移入以前に独自のものとして存在していた証拠になると主張している（ボノー一九三五、一三〇一四頁）。これは、「我国国民精神文化」を強調しようとする時局

の風潮から生まれた謬論である。

ボノーの意見は、翻訳すべき古典詩歌は『萬葉集』と『古今集』だが、『萬葉集』は読み方に議論があるから、残るのは『古今集』のみである、日本の学者には『萬葉集』の読み方と注釈の研究をして、迷いなく翻訳できるようにしていただきたい、というものである。『英訳萬葉集』が、国際文化振興会ではなく日本学術振興会による学術的な取り組みとされた背景には、こうした事情があつたことが分かる。実際にはこの時、すでに『英訳萬葉集』の事業は始まつていた。

三三三 日本学術振興会第十七小委員会による『英訳萬葉集』の編纂

一九三四年度から一九三九年度までの六年間で『英訳萬葉集』は完成した。その過程を日本学術振興会「特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要（第一〜第七）」（一九三五〜一九四三）に基づき、佐佐木信綱、小畑薫良、市河三喜、武田祐吉ら当事者の回想を援用してまとめる。

一九三四年度の発足にあたって委員長に瀧精一が就任、次の八人で委員会が組織された。瀧、姉崎、阿部、辻、鈴木の名は四月に、新村、佐佐木、市河は五月に就任した。

○文化史方面 瀧 精一、姉崎正治、阿部次郎、新村 出、

○国史学方面 辻 善之助

○国文学方面 佐々木信綱

○漢文学方面 鈴木虎雄

○英文学方面 市河三喜

まず、取り組むべきは『萬葉集』の一〇〇〇首の抄訳と決めた。そして同年十一月、信綱と共に『和文章稿』を書く「原案委員」に、斎藤茂吉、武田祐吉、橋本進吉、山田孝雄、吉澤義則の五名が就任した。橋本進吉と武田祐吉は佐佐木信綱と、『校本萬葉集』（一九二四～二五）を、吉澤義則は佐佐木信綱、藤村作とともに『萬葉集講座』（一九三三、春陽堂）を編んだ顔ぶれで、山田孝雄は『万葉集講義 卷第一～三』（一九二八～三七、宝文館）、武田祐吉は『萬葉集新解』（一九三〇、山海堂出版部）を著し、斎藤茂吉は歌誌『アララギ』で仲間と『萬葉集研究』（一九三四年七月～一九三八年六月）を連載中であった。

一九三四年度は、全委員で「萬葉集中外人二読マセルニ最モ適當ト思惟スル歌千首ヲ選（日本學術振興會一九三六、一～一六頁）」び出した。選定基準は「歌として秀れたものを選ぶのは当然であるが、〔・〕特に文化史等の上から注意すべき作を網羅することとした（佐佐木一九四二、五六～五七頁）」ほか、「外国人が読んで興味を感じるやうなものを網羅することとした（市河一九四七、一八二頁）」。

市河（一九四八）によると、このとき、斎藤茂吉は卷一、二一番の天武天皇「紫のにはへる妹を憎くあらば・・・」を入れるよう提案したが、時局柄、天皇家に関わる作品は、『さわらぬ神にたたりなし』で委員会としては残念ながら否決（二四頁）

したという。選定にこうした政治的な付度があったことは Ichikawa（一九三九）にも触れられている。

選定された一〇〇〇首には、長歌が一九九首（約一六パーセント）、旋頭歌が九首含まれる。『萬葉集』全体で長歌が約六パーセントであるのに比べると長歌の割合が大きい。Ichikawa（一九三九）は浦島や真間の手児奈の伝説を語る長歌を『萬葉集』の「叙事詩」として示している。かねて海外の翻訳者は長歌に注目しがちであった。作品の選定には、過去の翻訳から窺える外国人読者の関心や好みも考慮されたものと思われる。短歌も同じ状況で詠まれた数首をまとめて示すことが多い。

第十七小委員会が決定した英訳の方針は本稿「一 はじめに」に示したとおり、①現代の英語で、②自由詩の形で、③直訳に過ぎず、意訳に過ぎず、④ある程度の自由を認め、⑤独立して読んで詩として味わえること、であった。佐佐木信綱（一九四二）は、日本學術振興会の総会で、市河三喜がこれを説明し、英訳の例を黒板に書いたところ、「某科学者」が、これならば自分にも萬葉がわかる、と言ったと述べている。外国語訳が原文より分かりやすいという証言として Ichikawa（一九三九）は、森鷗外が、青島でドイツ語訳の『書経』や『礼記』を読んで、原文より読みやすいと言った例を示している（五九九頁）。日本語や中国語の古典について、英訳や独訳のほうがわかりやすいというのは、現代語だからという理由が大きいのではなからうか。現代日本語による「原案」も分かりやすいはずである。

表 1. 〈和文草稿〉の執筆分担

担当者	担当巻	巻ごとの歌数 (括弧の中は長歌の数、「*旋」は旋頭歌)	合計 (長歌の数)
山田孝雄	一、二	一〇五 (一五)、二〇八六 (一五)	一三六 (三〇)
吉澤義則	三、四	三〇一三七 (二〇)、四〇六六 (六)	二〇三 (二六)
佐佐木信綱	五、六、七	五〇四八 (九)、六〇八一 (二)、*旋一、七、二七 (〇)、*旋三	一五六 (一一、*旋四)
斎藤茂吉	八、十一	八〇三七 (四)、九〇四四 (二六)、一〇三三二 (二)、一〇四三 (*旋四)	一五六 (二二、*旋四)
武田祐吉	十二、十六	一〇二〇一 (〇)、一〇三六六 (三〇)、一〇四二六 (〇)、一〇五三八 (四)、一〇六三九 (四、*旋一)	一八〇 (三八、*旋一)
橋本進吉	十七、二十	一〇七四一 (九)、一〇八二五 (五)、一〇九四八 (二三)、一〇九五五 (五)	一六九 (三二)
合計	全二十巻	一〇〇〇 (短歌八三三、長歌一五九、旋頭歌九)	

抽籤によつて (佐佐木一九四二、五七頁、六名の「原案委員」の分担は次のように決定した。括弧内は内数である (表1)。

各委員は現代語訳と脚注による〈和文草稿〉を書き、綴りにして提出し、順に委員会にかけた。二年にわたる「慎重検討審議」の結果 (…) 従来意味ノ不明デアツタ所ヲ明ラカニ (日本学術振興会一九三八、二六四頁) し、外国人用の解説を加えた〈和文草稿〉は、一九三三年度末に完成した。一九三五年一月に、英訳者として小畑と中学教師で英詩人の石井雄之助 (筆名：白村) が嘱託に就任して英訳を開始、並行して新村出、阿部次郎らによる「序論、総論」、また「地図、索引及びローマ字書」も委員が分担して準備した。ローマ字の綴り方は英語読者に便利なヘボン式綴りが用いられた。

英訳は、石井が奇数巻、小畑が偶数巻 (小畑一九四三、二二八頁) を担当し、順次、主任の市河三喜がこれを校閲した後、「ホジソンの厳密な校正ヲ求メ、之ヲ更ニ全委員会ノ検討ニ附シタモノヲ再びホジソンの検閲を経テ決定記トシタ (日本学術振興会一九三九A、二六五頁)」。このために英訳者の二人は仙台上にホジソンを何度も訪ね、全委員会は毎月二日か三日連続して開かれた。それは「萬葉学研究会ともいふべき会 (佐佐木一九四二、五八頁)」で、「従来ノ萬葉解釈ノ上ニ出テ新解釈ヲ施シタ点も一再デハナカッタ (日本学術振興会一九三九A、二六五頁)」という。一九三八年五月をもつて一〇〇〇首の英訳が完成した。

作品の掲出順は時代別とし、「近江 (大津宮) 時代及びそれ以前」「飛鳥時代から藤原京時代」「奈良時代」「時代不明の作品」

表2. 今回の調査で確認された〈和文章稿〉

担当者	担当巻	所在不明のもの(歌数)	『英訳萬葉集』に収録されていない歌	所蔵総数
山田孝雄	一、二	一五三番(一)	四一番	一三六
吉澤義則	三、四	なし(○)	四二六番	二〇四
佐佐木信綱	五、七	巻五の全四八。巻六の九〇七番、一〇四九番(六六)	一〇七三番、一三九四番、一四〇五番	四五
齋藤茂吉	八、十一	なし(○)	なし	一五六
武田祐吉	十二、十六	なし(○)	二九八二番、三三三六番	一八二
橋本進吉	十七、二十	四二九三番(一)	四〇九八番、四〇九九番、四一〇〇番	一七一
合計	全二十巻	一一六首	一〇	八九四

の四分類の編成とした。巻末に旧国歌大観番号と「本書の番号(Our number)」が並べて示されている。一九三八年度末までに総説、付録等を含めた日本語原稿が完成し、一九三九年四月七日、東京会館において「竟宴」が開かれた(武田一九三九)。一九三九年度は和歌以外の部分の英訳を石井、小畑が引き続き行つて完成し、一九三九年度末(発行日は一九四〇年三月十五日)に岩波書店から刊行されたのだった。続く一九四〇年度からは、「原案委員」の顔ぶれを一新して能を五〇曲選定して英訳する事業にとりかかるが、戦争で中断し、この小委員会の事業として完成されたのは『英訳萬葉集』のみであった。

四. 『英訳萬葉集』の〈和文章稿〉

四一. 佐佐木信綱記念館所蔵の〈和文章稿〉

〈和文章稿〉は、三重県鈴鹿の佐佐木信綱記念館に所蔵されている。二〇二二年三月下旬に筆者は、館長の石田弘一氏、鈴鹿市文化財課の学芸員、田中里美氏の協力を得て、現地で〈和文章稿〉を閲覧した。田中氏によると佐佐木信綱担当の巻五は所在不明とのこと、今回調査の結果、佐佐木信綱の担当の一四首と、山田、橋本担当のそれぞれ一首が存在しないことがわかった。それ以外の八八四首は確認できた。なお、『英訳萬葉集』に含まれていない作品の〈和文章稿〉が十首存在する。旧国歌大観番号で表にまとめる。括弧内は内数である(表2)。山田の原稿に「実際には採録された」一五一番歌は採用しな

いはずだが「切貼（次節参照）」にあるから作成したとのメモ書きがあり、最終的に存在する一五三番歌が欠けている。橋本進吉の草稿に欠けている四二九三番歌はまとめて綴られた冊子の目次にも書かれていないから、あとで追加されたものだろう。最終的な『英訳萬葉集』に含まれない十首は、どこかの時点で計画に含まれていて、後に別の作品に差し替えられた可能性がある。

四一二 〈和文章稿〉の体裁

〈和文章稿〉は、専用の原稿用紙に肉筆で書かれている。四百字詰め原稿用紙の要領で中央の折山になるしきりを挟んで左右十行、縦が一マスで、その下に五マス分の高さの脚注用の空欄がある。左右の端に一行分の空欄があり上部に「巻」と印刷されている。巻数と旧国歌大観番号を書き入れるべき欄と見える。この用紙に佐佐木信綱「編」の岩波文庫『白文萬葉集』（二九三〇）と『新訓萬葉集』（一九二七）から該当する番号の作品が切り貼りされている。『白文萬葉集』は漢字だけで書かれたもの、『新訓萬葉集』は漢字かな交じりで訓（読み）を示したものである。一首の場合もあるが、長歌と反歌や、同じ状況で作られた一連の作品などはまとめて貼られている。これらを貼り付けた原稿用紙に、担当者が現代語訳と脚注を書き入れる。短歌の場合は切り貼りの用紙の余白に収まるが、長い詞書や長歌は五、六枚に及ぶこともある。

六名は一九三五年中に集中して執筆に取り組んだ。まとまったところで任意の表紙をつけて綴じて提出したようである。綴りは山田以外は旧国歌大観番号の順になっているが、山田孝雄の草稿は綴りごとに順序が前後して入り組んでいる。表紙の書き方はそれぞれだが、山田の原稿の表紙には十の綴りのうち七つに提出日が書かれているので日付順に並べると、八七七七・第一回提出、二九〇四九・六月三十日、一三一〇一九八・七月二十九日、一九九〇二一一・八月二十六日、二二七〇二三二・九月三十日、一五〇〇二〇五・十月三十一日、一〇一六〇十一月三十日、一七〇八〇〇・十二月二十三日という具合である。

四一三 六名の原案委員による〈和文章稿〉の特色

六名の〈和文章稿〉は、どんなものだったのだろうか。原歌にない言葉を補った部分には傍線を、固有名詞には二重傍線を引くこと、固有名詞を中心に振り仮名を多めに振ることが申し合わされていたようである。以下に、六名の原稿の特徴をまとめる。

（一）山田孝雄（二八七三～一九五八）

文中の括弧書きの説明や脚注が多く、注釈書めいた原稿が目立つが、一方で括弧書きが少なく傍線部が多い主情的な原稿もある。前者は注釈的现代語訳で、作品としては推敲の足りない印象を与えるが、後者は、読者が感情移入して読むことができ。両者は経時的な変化ではなさそうである。両方の例をあげ

ておく。勢いのあるペン字で書かれている。

例…一五番歌と八五番歌

渡津わたつみ海の豊旗雲に入日さし今宵の月夜明らけくこそ

中大兄（天智天皇）

（わたつみの、枕詞であるが実感の意味もある）海の上に豊旗雲（旗のやうにたなびいて見えるみごとな雲）に入日がさして（そのさまがまことになるはしい。）この様子では今夜の月夜はきつと澄み渡つて佳いに違ひない。

君が行きけ長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

磐姫皇后

陛下のご旅行は月日が多く経ちました。どうしてかう長く旅行してお出でになるのであらうか。あの山を訪ねてお迎へに参りませうか。それともかうしてゐて、ただいつまでも待つて待つてゐることにしませうか。あゝ、どうしたらいいのだらうか。

一五番歌では、「海の上に豊旗雲に」の「に」「今夜の月夜は」「夜」の重なりは、推敲の余地がある。文芸的現代語訳とは言い難い注釈的現代語訳だが、「原案」なのだから、的確な解釈を示し、文芸的な工夫は英訳に任せるといふ姿勢にも一理ある。枕詞「わたつみの」を「実感の意味もある」として「海の上

上」と訳したのが、英訳では that rim the waste of waters（直訳…大海原を縁取る）と詩的な言葉で生かされた。一方、八五番歌は傍線部を補つて感情を前に出している。英訳も情感こもる表現でこの原稿に即しているが、傍線部は省かれている。

（2）吉澤義則（二八七六—一九五四）

作者の立場や身分に応じて文体や言葉を巧みに使い分ける。端正なペン字で、修正が少なめである。改行を工夫して、自由詩として整えている。枕詞を現代語の詩的表現として生かすなど原歌の香りを残す努力も感じられ、表現が豊かである。文芸的現代語訳と言える。

例…二三六番歌・二三七番歌

不聴いみなといへど強ふる志斐しひのが強語しひがたりこの頃聞かずて朕恋わがひにけり

「いや、もう沢山」といつても無理に話してきかせる志斐しひ（第二人称の気持）の押売話、それをこの頃妾わがは聞かないで、すつかりき、たくなつてしまつた。

いなと言えど語れ語れと詔まをらせこそ志斐しひひは強語しひがたりと云る

「いいえ、もう御免下さい」といつても「話せ、話せ」と陛下がおつしやるからこそ、志斐しひ（第一人称の気持）はお話しますのです。それを陛下は押売話だとおつしやる。

英訳をみると二首の冒頭に吉澤の直接話法が生かされている。「わたし」に「妾」の字をあてたのは英訳では性別が必要であることに配慮し、女帝であることを表したのだろう。この作品には傍線部がない。吉澤の原稿に傍線は比較的少ない。傍線部のあるものも一首挙げておく。

例・四八八番歌

君待つと吾が恋ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く

額田王

あの御方がいらつしやるのを待つて、私が恋しがつてゐると、あの方がはひつてでもいらつしやるかのやうに、我が家の簾を動かして、秋の風が吹いてゐる。

挿入された傍線部は、As if it were you...と英訳に生かされた。

(3) 佐佐木信綱（一八七二—一九六三）

のびやかなペン字で、傍線は赤インクである。作品の背景や事情を盛り込む傾向があり、その部分に赤い傍線が引かれる。イメージを具体化し、映像的な作品に仕上げている。これは弘綱から受け継いだ「口訳国文叢書」での現代語訳の方法で、特に英訳を意識したわけでもなさそうである。原稿に修正は多く、ときに別紙を貼り込んだりして、苦心のほどが知られる。

例・一〇六八番歌と一〇九六番歌

天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎ隠る見ゆ

柿本人麻呂

広々とした天の海に、重なり合つて雲の浪が湧き立ち、三日月の舟が、群がつてをる星の林の中に、漕ぎ隠れてゆくのが見える。

いにしへの事は知らぬを我見ても久しくなりぬ天の香具山

作者不詳

天から飛んできたので天のかぐ山と名づけられたという語り伝へもあるが、さういふ昔のことは見ないことであるから、よくは知らないが自分が見てからでも、随分年月が久しくなったことである、この天の香具山は、まことに、神々しい山である。

赤い傍線が目立つ。一首の事情は具体的に、確かにわかりやすいが、一〇九六番歌の最後の「神々しい」と讃嘆する部分などは過剰である。これらは英訳に必要ではなかったやうで、英訳では傍線部がすべて省かれている。

(4) 斎藤茂吉（一八八二—一九五三）

身近な言葉で語るように書かれ、「ね」「よ」「なあ」といった終助詞が多用されている。作品主体に応じて文体や敬語が自由に使い分けられ、躍動感のある文体で読み応えのある現代語

訳で、英訳の原案であることを忘れさせる。情報を補う傍線部分
分が長い場合がある。細かい文字による脚注も多めである。細
い筆、または太いペンによる丸みをおびた文字で、一枚ごとに
押印があり修正か所の少ない改まった原稿である。紀女郎と
大伴家持の贈答歌を挙げる。

例…一四六〇番歌と一四六二番歌

戲奴がため吾手もすまに春の野に抜ける茅花ぞ食して肥えま
せ 紀女郎

これは、お前、奴さんのために、私が春の野に行つて折角
取つて来た茅花でございます。これをめしあがつてお肥り
なさいまし。

吾が君に戯奴は恋ふらし給りたる茅花を喫めどいや瘦せに瘦
す 大伴家持

あ、この奴の私はアナタさまに恋してゐると見えますね。
折角肥れとお仰つて贈つてくださいました茅花をいただき
まして、ますます痩せるばかりですヨ。

「お前、奴さん」は英訳では O slave 「直訳…奴隷よ」とそつ
けない。文体からかもしだされるユーモアが英文では伝わらな
いのは無理もなく、茂吉は英訳のイメージをもたずに書いた可
能性がある。もう一首挙げる。

例…一五五二番歌

夕月夜心も萎ぬに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも

湯原王

夕月の光が幽かに寂かに庭にさしてゐる。庭草にはもう露
の玉が置いて、心にしみとほるやうに（しをしをとさせる
やうに）蟋蟀が鳴いてゐる。

傍線部は感傷的で、「心も萎ぬに」を「心にしみとほるやうに」
は美化しすぎで、添えられた括弧書きも、わかりにくい。英訳
では *Burthening my weary heart* 「直訳…私の疲れた心に負
担をかけて」と、蟋蟀の声が心を萎れさせることを簡潔に伝え
ている。傍線部はすべて訳出されていない。

(5) 武田祐吉（二八八六―一九五八）

ノートをとるようなペン書きで、修正か所が多い。語ごとに
置き換える逐語訳で、注釈的現代語訳の色彩が濃い。一首の終
わりに「男の歌」「女の歌」「男の歌か女の歌か不明」と書き添
えたり、訳文中、「妹」の訳に「そなた（愛人・女性）」と書き
入れたりしている。英語に必要な性別を明記する一方で、英訳
に反映されないであろう文体や単語選びの工夫は最小限にとど
めたのかもしれない。詩として味わうには日本語の表現力に乏
しい。

例…三三三一五番歌と三三三一七番歌（前者は「女の歌」、後者は「夫の

答歌」とある。

泉河渡瀬ふかみわが背子が旅ゆき衣ひづちなむかも

作者不詳

泉川の川渡りを為る場所が深いので、貴方様の旅行服が濡れるでございませうよ。

馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ

馬に取り代へたら、お前が歩いていくことでせう。よしや石を踏んでも、私(複数)は二人連れで行きませう。

女性が夫に馬を持たせたく、母の形見の鏡と領巾を馬に代えるようにいう長歌の反歌である。「旅行服」は身も蓋もなく、「濡れるでございませう」という表現はぎこちない。武田の原稿中には「スルでございませう」という語法がほかにも見られる。英訳を見ると、「貴方様の旅行服」は Your travelling clothes とその通りである。「私(複数)」は Let's walk, the two of us とこれもその通りで、英文のほうが読みやすい。この英語を日本語に訳すなら「私は」は不要だろう。武田は注釈的现代語訳の立場での「原案」に徹し、詩情を英訳者に託したようである。

(6) 橋本進吉(一八八二—一九四五)

訳文は分かりやすく端整で、感情表現は抑制的である。脚注などに作品の背景や事情についての解説が細かい字で書きこま

れている。ペン習字の手本のような整った筆跡だが、推敲のあとは目だつ。巻二十の防人の歌より二首挙げる。

例・四三二二番歌と四三七三番歌

我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

若倭部身磨

私の妻はひどく私に恋ひがれてゐるらしい。私の飲む水にまで妻の影がうつつて忘れようとしても、決して忘れる事が出来ない。(「飲む水」は泉又は井の水であらう。)

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

火長今奉部與曾布

今日からは家郷を顧みることなく、天子様を守護し奉る賤しい御楯として出ていくのだよ、この私は。(「醜の」は自ら謙遜していふ。「御楯」は君を守護する兵士を楯にたとへたのである。)

前者では橋本は原歌には明記されていない人称名詞を書き加え、後者では「家郷を」と内容を補って歌意を明確にしている。これは英訳に必要な情報で、そのまま英訳に反映されている。謙遜の表現と注記した「醜の御楯」は As Her Majesty's humble shield.(直訳:陛下のささやかな盾として)と忠実に訳出された。以上をまとめると、佐佐木は父の志を継ぐ文芸的現代語訳を

追求し、吉澤と斎藤は英訳に反映されるかどうかはともかく工夫を凝らした文芸的現代語訳を行った一方、山田、武田は注釈的現代語訳の色彩が濃く、特に武田は英訳の準備に徹して訳したようである。橋本の訳は注釈的現代語訳でもあり端整な文芸的現代語訳としても味わうことができる。

四一四 修正意見に見る〈和文章稿〉の目的

上記の自筆原稿は、提出後、委員会での修正を経て確定されたが、その様子をうかがわせる謄写版印刷の資料の一部も佐佐木信綱記念館に所蔵されている。原紙の上から五分の三あたりの横線の上は訳文、下は脚注である。保管されている一綴りは表紙に「第九号 昭和十年六月〔空白〕日」「斎藤委員第一回原稿修正案、原稿第四回十首、山田委員原稿第三回二十五首」とあつて該当する〈和文章稿〉が転写されている。同じく謄写版の「第十号 昭和十年六月〔空白〕日 第拾七小委員会原案委員会々議記事 斎藤委員原稿第五回分 十七首」と表紙に書かれた冊子もある。この議事録によると、本稿三一二で紹介した国際文化振興会のボノーの講演「日本の詩歌と外国語」について英訳担当の小畑が報告し、これに関して新村委員が新聞に寄稿することに決まったとある。ほかは個々の訳文についての解釈をめぐる議論である。二三五番歌について英訳担当の石井が「皇」は女性が男性かをたずね、女性だとの答えを得たとある。『英訳萬葉集』を確認すると Empress (女帝) goddess

(女神)の語が用いられ、女帝の持統天皇であるとの脚注がある。議論は、地名等の読み方(訓)や言葉の解釈をめぐるもので、単数か複数かなども議論の対象となった (Table 1-93-9)。現代語訳の表現の巧拙は問題にならなかった。これをたたき台として望ましい英訳を得ることが委員会の目的だったからである。

五 〈和文章稿〉から英訳へ

五一一 〈和文章稿〉とは何だったのか

〈和文章稿〉は翻訳に際して行われた活発な議論の前の経過的なものであること、翻訳の質にばらつきがあることなどを考えると、本稿冒頭の「独立して読んでも十分詩として味わえる」のか、という問に対する答えは、いくぶん否定的なものになる。委員会には、これを独立した読み物として公刊しようという考えはなかった。

当初より佐佐木信綱の頭の中にあつたのは、英訳のみならず多言語訳の拠点としての現代語訳であつた。佐佐木は、日本学術振興会の席でも「独語、仏語、伊語、支那語等にも拡大されたい」と希望したが、それは容れられなかった(佐佐木一九四二、六二頁)。諦めきれなかった佐佐木は、ドイツ語訳は松本高校のドイツ語教師ツアヘルトに、中国語訳は錢稻孫が試みていたのに注目して錢に委嘱してそれぞれに民間団体の支援を取り付けた。戦争で予定どおりにはいかなかったが、中国語訳は一九五

九年に日本學術振興会より『漢訳萬葉集選』として刊行された。佐佐木はこれを喜び、同書巻末に寄せた文章に「さらに朝鮮語や印度語、イタリー語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語にも及ぶやうにと希望してゐる（佐佐木一九五九、一八八頁）」と綴っている。

日本語の古典に通じていた錢稻孫は、原文から『詩経』に準ずる古典的な中国語で訳した。それでも、難解と思われた卷三七九一番の長歌について、錢が佐佐木に求めたのは「口語訳」であった。^⑤『萬葉集』の外国語訳の拠点となる現代語訳の決定版は有用で、それが〈和文章稿〉への志でもあったが、これは夢に終わったのだった。

〈和文章稿〉は、当時の顯学六名の思考、議論の跡が辿れる貴重な肉筆資料である。『英訳萬葉集』、ひいては戦時体制下の『萬葉集』の受容をめぐる多方面からの思考を促す価値ある資料であることは疑いない。

五二二 〈和文章稿〉と英訳の不一致

さて、〈和文章稿〉と最終的な英訳とを比較してみると、両者の不一致が目につく。〈和文章稿〉がときに、原歌にないことばや注釈を過剰に補いがちであるのに対し、総じて英訳は短く、原歌にないことばを補うことに禁欲的である。四節で挙げた中から示すと、山田孝雄による八五番歌、佐佐木信綱による一〇九六番歌が典型である。斎藤茂吉の一五五二番歌に至って

は、原歌にもどって訳したように見える。つまり、〈和文章稿〉の過剰な部分は英訳で潔く割愛され、〈和文章稿〉よりも原歌に近いのである。

簡潔な名訳は『英訳萬葉集』の価値を高め、戦時体制の産物であった『英訳萬葉集』に時代を超える力を与えた。なぜ、このようなことが起きたのだろうか。

五二三 校閲者、リーフ・ホジソンの功績

『英訳萬葉集』を名訳に導いた第一の功績は校閲者リーフ・ホジソンにあると思われる。小畑と石井は担当分を仙台のホジソン宅に持参し、校閲はその場で行われた。小畑（一九三八）は、日本語を解さず『萬葉集』に予備知識のないホジソンを、「吾等のもつ国民的尊崇や愛着に捉はれず、また原歌の一つ一つが持つ優越性や主要性を離れて、英訳そのものの詩的価値を公正に評価し得る」と信頼して自分の訳をホジソンに見せて相談し、ホジソンの反応から「泰西読者の間に呼び起こすであらう反響」を予想しつつ、歩み寄るべきは歩み寄り、受け入れられないときは議論を厭わず、東京行き最終列車の時刻が迫るまで討議をした。オブザーバーとして土居光知が同席したという。土居の名は小畑（一九三八）にしか現れず、刊行後、土居が『帝國大文学新聞』に書いた「英訳萬葉集（①）〜⑤」（土居一九四〇）にも触れられていない。ホジソンの同僚として非公式に協力したのだろう。小畑が必死に説明すると「充分に原歌の妙味を体得し

た彼〔ホジソン〕は、私〔小畑〕の貧困な語彙には到底見出されない適確剝切なる訳語を提示して「小畑を喜ばせたという（小畑一九三八、四頁）。できた原稿を受け取った市河三喜は、これを「仮訳」として全委員会に配布、委員会では改めて原歌と照らし合わせて「丹念に検閲する」。委員が納得できないとなると、再度小畑がホジソンに持参、議論をして市河に送って委員会へというコースを多い時は三回繰り返して、「仙台と東京の間をしばし宙に迷はねばならぬ憐れむべき運命に陥る歌」もあったという。（和文章稿）と英訳とに不一致が目立つのも道理である。

小畑はその三年半前からホジソンを慕い、ホジソン家では夫妻で小畑をあたたかく遇するばかりか、一緒に仙台旅行をしたことも数度に及んだ。こうした信頼関係あってこそその真剣勝負の議論であり、優れた英訳の完成であったと言える。

一九三八年五月に『英訳萬葉集』の全一〇〇〇首の翻訳が終わると、七月にホジソンは英国に帰国した。翌年にはヨーロッパで第二次世界大戦がはじまり、一九四一年十二月には日本が米英と戦争を始める。その直前に、双方が信頼し合い尊重し合つて熱い議論を交わし、時代を超える翻訳に行き着いたのだった。帰国の際には、小畑が石井、市河そして佐佐木に声をかけて東京でホジソン夫妻の送別の宴を設けた。ホジソンは「相変わらず愉快にはしゃいで居た（小畑一九三八、六頁）」という。

ドナルド・キーンは『英訳萬葉集』のコロンビア大学出版版（一九六五）の「前書」(Forward)で次のように述べている。

『萬葉集』の翻訳で最も満足できるものは本作品である。日本人の英文学と日本文学の学者による委員会によって原案が作られた後、当時日本に居住していた英国の詩人ラルフ・ホジソンによって改訂 (revise) された。日本と西洋の学者の共同作業は、難しい作品の正確でかつ文学的に優れた翻訳という永遠の課題に対する最善の解決策だと繰り返し言われてきたが、私の知る限り、英訳万葉集はそうした共同作業の唯一の成功例である。

一般に、西洋人の方は、〔…〕無意識に好みの言い回しに作り直そうとしたり、〔…〕西洋の読者にとつてより魅力的な詩にしようとしたりしがちである。そうした場合、日本人の方は、異議を唱えるのを遠慮しがちである。しかし、ここでは、この組み合わせが例外的にうまく機能し、イギリス人と日本人が等しく互いを尊重しあっている。（Keene Donald (1965) pp. iii ~ iv、日本語訳は河路による。）

「真に萬葉の精神を訳出するは、邦人でなければ（佐佐木一九四八、四三頁）」ならないと意気軒高な委員会の総勢と英国の詩人ホジソン一人の構図だが、ホジソンの背後にはこれから届けるべき欧米の読者がいた。読者に届ける使命感から委員会はホジソンの意見を尊重し、ホジソンも彼らを、そして『萬葉集』を尊重した。容易には譲らず粘り強く議論して深い作品理解に至り、的確な訳に導いたホジソンの功績は大きい、そもそもこ

の方法を決めてホジソンに白羽の矢をたて、真剣に議論を繰り返した委員会も見事であった。

六、終わりに

鈴鹿の佐佐木信綱記念館の二階の大きな机の上で(和文章稿)を開いて見たときの感動は忘れがたい。肉筆原稿の前に座ると、かつて大きな使命感をもつてここに座っていた人の気魄が伝わった。ときに書き泥み、線で消して修正したり、別紙を貼り込んだりしている。思わず引き込まれて読んだが、最終的な英訳との距離は思いのほか大きかった。

『英訳万葉集』は戦後の一九四八年にも刷られ、一九八六年には「第四刷」として復刊された。ドナルド・キーンはその著(二九五、一九九三)において『萬葉集』の作品にはこの翻訳を引用している。コロンビア大学出版から一九六三年に刊行されたほか、現代にいたるまで様々にで読み継がれている。『英訳萬葉集』の一〇〇〇首には、初めて触れる外国人にも想像しやすいものが選ばれたという特色がある。それは初めて触れる日本人にも読みやすいに違いない。長歌の多さは、『萬葉集』の印象を新しくする。日本で長歌が短歌ほど親しまれないのは、長い原文が難しいからだろう。『英訳萬葉集』の現代日本語訳があれば、日本語読者もこの魅力に改めて出会えるのではないかと思う。ドナルド・キーン(一九九四)もリービ英雄(二〇〇四)も長歌を読む喜びを英語を通して訴えている。

ドナルド・キーン(一九三二～二〇一九)の日本文学との出会いは、ちょうど一九四〇年、十八歳のキーンがたまたま本屋でアーサー・ウエーリ¹⁵⁾による英訳の『源氏物語』を見つけたのがきっかけだった(キーン/河路二〇一四、二四頁ほか)。キーンは、対談やインタビュウの場面で繰り返し、日本の古典教育を批判した。原文を絶対視し、古典文法の学習に終始して作品を味わう楽しみを伝えていないというのである。その結果、古典文学を味わったことのない日本人が多い、自分も、もし初めから原文を強いられていたら日本文学に関心をもつことはなかったと現代語訳で読むことを勧めていた(瀬戸内/キーン二〇一八、二八五頁ほか)。

海外の英語の読者に日本を紹介する目的で英語で書かれた著作として、新渡戸稲造の『武士道』(原本一八九九)、岡倉天心の『茶の湯』(原本一九〇六)、内村鑑三の『代表的日本人』(原本一九〇八)などは後にその和訳が日本で読まれ、現在も読み継がれている。『英訳萬葉集』の和訳は、英語の読者が味わった『萬葉集』の長歌・短歌の魅力が、現代日本語で生き生きと立ち上がってくる新鮮なものになるに違いないと思える。

注

(一) 小委員会は特別委員会と並んで「国家重要ノ問題ノ解決」のために「随時諸官衙、官公私立大学専門学校、同研究所試験所及有力会社、協会等ノ学者、専門家、経済家等ノ權威ヲ以て(日

本学術振興会一九三九B、七〇八頁」構成された。戦争で中断する一九四二年度末までに都合五十五の小委員会が活動した。理科系分野の研究が多く、文学を対象とするのは第十七小委員会のみである。

(2) 佐々木弘綱の『古事記歌俚言解』草稿の松川春文による写本(二八九〇)が天理大学に所蔵されている(国立情報学研究所のデータベース: <http://www.rihkai.uis.ac.jp/books/>)。データベース: <http://www.rihkai.uis.ac.jp/books/>による。

(3) 「口訳国文叢書」の第一回配本『口訳土佐日記』(一九三八)の巻末広告による。

(4) 佐佐木信綱の旧友、新村出も『萬葉集』の外国語訳への関心を共有していた(新村一九四八ほか)。

(5) 外国語(主として英語)による日本からの発信は、日本人が日本語で書いた原稿を英訳する(させる)べきだという考え方は、日本が国際連盟を脱退してから強化された国際文化事業に顕著な傾向で、同時期の国際文化振興会における日本語普及事業においても同様であった。(河路二〇一一)。

(6) 小畑(一九四三)は、同書「序」によると一九三九年秋に行われた講演の速記原稿による原稿で、信綱に萬葉集英訳への協力を求められたのは「十年ほど前(二二八頁)」とある。

(7) 小畑薫良は、大学院修了後、ニューヨークの日本総領事館に勤務して会議通訳に従事し、帰国後『英訳萬葉集』に携わったあと、一九四二年に大東亜省嘱託、一九四九年に外務省事務官、一九五六年には外務省参与となった。(鈴木一九九七、一〇六)

一〇九頁)。

(8) 齋藤茂吉「編」(一九四〇)。なお、現在も読まれている齋藤茂吉『萬葉秀歌』(一九三八、岩波新書)は(和文章稿)と並行して作成されたことになる。

(9) たとえば、Dickins(一九〇六)は、八四頁にわたる『萬葉集』の紹介のあと、全長歌の英訳(短歌はない)を示している(川村一九九七、一六一〜一八六頁)。

(10) 巻六の一〇二〇番歌と一〇二二番歌はあわせて『英訳萬葉集』の八〇六番となっている。ここでは『英訳萬葉集』を基準にこれを一首と数えた。

(11) 『英訳萬葉集』の「総説(Introduction)」は冒頭六十八頁にわたる。第一部は『萬葉集』成立の歴史や構成、詩形の説明等、第二部は政治的社会的背景、文化史等、第三部はその後の研究史や諸外国語への翻訳等である。第一部と第三部が新村、第二部が阿部の担当であると見られる。阿部の担当部分はその後の知見(阿部一九四三)を加えて阿部(一九四五A、B)として刊行され、新村の担当部分は「萬葉集總論」(新村一九四八、三〇四頁)として刊行された。なお、この日本語原稿と英訳も必ずしも一致していない。

(12) 能五〇曲の選定は一九四一年度に終え、新たな「原案委員」が原案作成を始めた(日本学術振興会一九四三、三一〜三二二頁)後、中断したが、戦後一九五五年に日本学術振興会日本古典翻訳委員会編 *The Noh Drama: Ten Plays from the Japanese*

が出版された。一方、一九三七年に国際文化振興会から解説、能面や能装束、舞台写真とともに「羽衣」「葵上」の英訳を収めた『The Noh Drama 能』（一九三七）が出版されている。英訳は外務省の島内敏郎が担当した。

(13) 一九四四年二月三日付け銭稲孫より佐佐木信綱宛書簡に「竹取翁の歌誠に難解を極め候。その口語訳賜はれ度願上候」と書かれている（郷双双二〇一四、一〇七頁）。

(14) ホジソンの帰国については、『東京朝日新聞』一九三八年七月十六日付朝刊十二面で報じている。

(15) 「ウエーリ」という表記をドナルド・キーンは原語の発音に近いと推奨したので、それに従った。

【参考文献】

阿部次郎（一九四三）『萬葉集の文化史的位置』『萬葉集について』

岩波書店、一〇四九頁

阿部次郎（一九四五A）『日本叢書一三 萬葉時代の社会と思想』

生活社

阿部次郎（一九四五B）『日本叢書一四 萬葉人の生活』生活社

市河三喜（一九四七）『英訳萬葉集について』『英語雑考』愛育社、

一七八〜一九六頁

市河三喜（一九四八）『英訳萬葉集に就いて』『余情第八集佐佐木信

綱研究』千日書房、二二〜二四頁

小畑薫良（一九三八）『レーフ・ホチソン氏と英訳萬葉集』『心の花』

第四十二巻第九号、三〜六頁

小畑薫良（一九四三）『英訳萬葉集に就いて』『萬葉集について』岩波書店、二二五〜二五三頁

大川茂雄／南茂樹「編」、上田萬年／芳賀矢一「監修」（一九〇四）『国

學者傳記集成』大日本図書株式会社

河路由佳（二〇一一）『日本語教育と戦争——「国際文化事業」の

理想と変容』新曜社

川村ハツエ（一九九七）『F. V. デイキンズ 日本文学英訳の先駆者』七月堂

キーン、ドナルド「著」、土屋政雄「訳」（一九九四）『日本文学の歴史 古代・中世篇上』中央公論社

キーン、ドナルド／河路由佳（二〇一四）『ドナルド・キーン わたしの日本語修行』白水社

窪田空穂（一九三八）『現代語訳国文学全集第二巻』伊勢物語・落窪物語』非凡閣

国際文化振興会「編」（一九三七）『The Noh Drama 能』国際文化振興会

小松靖彦（二〇二二）『近代的〈注釈〉とは何か』全国大学国語国

文学会第一二四回大会シンポジウム資料」一〜一〇頁（『文学・

語学』第三三六号（二〇二二））

斎藤茂吉（一九三八）『萬葉秀歌（上・下）』岩波新書、岩波書店

斎藤茂吉「編」（一九四〇）『萬葉集研究（上・下）』岩波書店

佐佐木信綱「編」（一九二七）『新訓萬葉集（上・下）』岩波文庫

佐佐木信綱「編」(一九三二)『白文萬葉集(上・下)』岩波文庫

佐佐木信綱(一九三八)『英訳萬葉集に就いて』『心の花』第四十二

卷第九号、六、七頁

佐佐木信綱(一九四二)『萬葉清話』靖文社

佐佐木信綱(一九四八)『雲——佐佐木信綱隨筆集』京都印書館

四三、四五頁

佐佐木信綱(一九五三)『ある老歌人の思ひ出』朝日新聞社

佐佐木信綱(一九五六)『佐佐木信綱文集』竹柏会

佐佐木信綱「編」(一九五六)『萬葉集事典』平凡社

佐佐木信綱(一九五九)『漢譯萬葉集選縁起』錢稻孫【訳】『漢譯萬

葉集選』日本學術振興会 一八五、一八八頁

佐々木弘綱「解」小中村清矩「閲」(一八八四)『添註 土佐日記俚

言解』上下(和綴じ本 出版人 島屋 別所平七)

佐々木弘綱「著」佐々木信綱「補」(一九四〇)『(口訳)国文叢書

4) 口訳伊勢物語』人文書院

新村出(一九四八)『萬葉苑枯葉』生活社

新村出(一九五九)『後語』錢稻孫【訳】『漢譯萬葉集選』日本學術

振興会 一八九、一九二頁

鄒双双(二〇一四)『文化漢奸』と呼ばれた男——萬葉集を訳し

た錢稻孫の生涯』東方書店

鈴木義昭(一九九七)『日本における聞一多——井上思外雄と小畑

薫良——』『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』九、九九

一〇一頁

瀬戸内寂聴／キーン、ドナルド(二〇一八)『日本の美德』中央公

論新社

武田祐吉(一九三九)『英訳萬葉集竟宴記』隨筆集 女身萬葉』

九六、九九頁

次田潤(一九二二)『萬葉集新講』成美堂書店

土居光知(一九四〇)『英訳萬葉集①』⑤『帝国大学新聞』(一九四〇

年六月十日、十七日、二十四日、七月一日、八日の「文学」欄)

日本學術振興会(一九三五)『日本學術振興会年報 第一号(自昭

和七年十二月至同九年三月)』

日本學術振興会(一九三六)『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ

概要 第一回(昭和十一年五月)』

日本學術振興会(一九三九A)『特別及び小委員会ニヨル総合研究

ノ概要 第三回(昭和十三年五月)』

日本學術振興会(一九三九B)『日本學術振興会年報 第六号(自

昭和十三年四月至同十四年三月)』

日本學術振興会(一九四〇)『The Manyōshū(英訳萬葉集)』岩波書

店

日本學術振興会(一九四三)『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ

概要 第七回(昭和十七年五月)』

ボノ、ジョルジュ「述」、堀口大学「譯」(一九三五)『日本詩歌と

外国語——テクニクと翻譯』財団法人国際文化振興会

リービ英雄(二〇〇四)『英語でよむ万葉集』岩波新書、岩波書店

Dickins, Frederick Victor(一九〇六)『Primitive & Medieval

Japanese Texts. Oxford: Clarendon Press

Nippon Gakujutsu Shinshokai (一九六五) *The Manyōshū: The Nippon*

Gakujutsu Shinshokai Translation of Thousand Poems with the

Texts in Rōmaji. New York: Columbia University Press

Keene, Donald (一九五五) *Anthology of Japanese Literature: From the Earliest Era to the Mid-Nineteenth Century* (『日本文学選集: 古典篇』). New York: Grove Press

Keene, Donald (一九六五) "Foreword". *The Manyōshū: The*

Nippon Gakujutsu Shinshokai Translation of Thousand Poems with the Texts in Rōmaji. New York: Columbia University

Press, pp. iii~viii

Keene, Donald (一九九三) *Seeds in the Heart: Japanese Literature from Earliest Times to the Late Sixteenth Century* (『日本文学

の歴史: 古代編』). Henry Holt & Co

Ichikawa, Sanki (一九三九) "On the New English Version of the "Manyōshū" (『英文学研究』一九卷四号 五八五~五九九頁

【謝辞】

〈和文章稿〉の閲覧に際しましては三重県鈴鹿市文化財課、佐佐木信綱記念館にご許可いただき、鈴鹿市文化財課の学芸員、田中里美様には大変お世話になりました。佐佐木信綱記念館館長の石田弘一様には関連の施設、史跡をご案内いただき、佐佐木信綱と新村出の書簡を整理し『佐新書簡』(竹柏会心の花 二〇一九)を編集された

北川英昭氏にもお話をうかがうことができました。また、本稿執筆にあたっては小松靖彦先生より真摯なご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

(かわじ・ゆか／杏林大学特任教授)